

どの研究室を選択するか迷っていた時「責任を持って指導しますので真面目な態度で臨んでください、手先の器用、不器用は問いません、失敗は大いに結構です。」この安心感の感じられる一文に惹かれ、生理活性物質探索病態解析分野の研究室を選択した。今回の一ヶ月にわたる研究室配属を通して細胞培養、TA クローニング、電気泳動、遺伝子導入、制限酵素反応といった基礎研究を行っていく上でなくてはならない手技について学べただけではなく、AM に関する実際の論文に触れることで臨床研究を学生である私たちにも身近に感じられた。

この研究室配属で行ったことは二年生の生化学実習で行っていたのだが、私は失敗することを恐れて他人任せにしていたことが多かったので手技的なことは殆ど身についておらず、最初の一週間程は作業を行っても失敗続きだった。しかし桑迫先生はそこで厳しく叱咤するのではなく失敗から学ぶことの大切さを教えて下さり、付きっきりで丁寧に教えて下さった。次第にピペットマンの扱いや電気泳動、細胞の継代などの作業スピードも速くなっていき、自分達だけでも自信を持って作業を行えるようになっていった。今回基礎研究で使用する実験器具を自信を持って扱えるようになったことは今後の自分の選択肢を広げる上で必ず役に立つと感じられた。作業を行うことが出来るようになったので次は自分達でプロトコルを作成し、実験を進められるようにもなりたいとも思うようになり、研究に対しても非常に興味が出てきた。今までの基礎医学科目の実習と違ってただ与えられたプロトコルに従って作業を行っていただくだけではなく、桑迫先生はなぜこの作業を行うのか、なぜ Vortex にかけては駄目なのか、なぜこの plate では色が変わったのか等一つ一つの作業の意味を自分たちで考えることに重点を置いて指導して下さったので今迄意味も分からずただ丸暗記をしていた用語や知識への理解が非常に深まった。又、今回の様にしっかりと理解していると暗記を行うにしてもその定着効率が良いことに気付いた。

最後の一週間では論文の抄読会を行った。神経科学の講義の際に論文を読んだことはあったが、抄読会は初めての経験だった。英文を読むことは好きだったので読むこと自体は楽しかったのだが、いざ日本語に訳そうと思うと中々綺麗に訳すことが出来ず論文特有の訳し方や言い回しに苦労した。自分の担当範囲を発表し、桑迫先生がオーディエンスとしてそれを聞いていたのだが、突っ込まれると言葉に詰まり、論文の内容や行った実験に関するグラフを他人に説明することの難しさを知り、論文やグラフの読み取り方を指導して頂けたことは非常にためになった。

一ヶ月というのは長いようで思ってる程短く、あっという間に過ぎてしまった。しかし、班員とは協力しながら非常に良い雰囲気の中で伸び伸びと毎日の実習を行うことが出来た。そして自分の研究よりも私たちを優先して丁寧に指導して下さった桑迫先生の